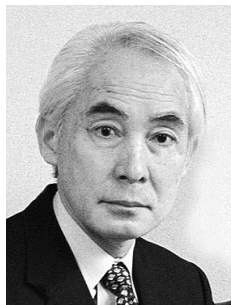


高専における長期一貫教育について



前田 三男
(久留米工業高等専門学校校長)

五年間一貫教育の効率性

本誌の巻頭言は大部分大学の学長先生が書いておられ、高専の校長が登場する機会は少ないようなので、大学と比較して高専が行っている長期の一貫教育の良さと、その問題点について考察したい。私は国立大学工学部に約四〇年間勤務し、二年半ほど前に現在の職場に着任したので、大学と高専の教育方法の違いを現場で肌で感じてきた。

ご承知のように、高専は中学卒の学生を受け入れ、五年間の一貫教育を行っている。その後の二年間の専攻科を加えると、大学と高等学校とが同じキャンパスに存在する学校といえよう。高専の多くは、日本が高度成長期にさしかかる四〇年ほど前に設立され、現在全国に国公私立あわせると六一の高専が存在する。多くは国立大学が存在する県庁所在地を避け、地方都市に展開しているため、地域との密着性が高い。一クラス四〇名の少人数教育で、日本の経済発展を支えた実践的な中堅技術者を育ててきた実績は産業界からも高く評価され、

現在でも就職状況は極めて良い。最近のOECDの高等教育調査団からも、高専のユニークな教育システムは高い評価を受けていると聞いている。

以前から私立には中学・高校の一貫教育を行う学校は多かった。中には「幼稚園から大学まで」というのをうたっている学校さえある。そういった長期一貫教育は、最近では少子化による入学生確保の手段ともなっているようで、公立学校にも広がりつつある。学生側から見たこの種の一貫教育の最大のメリットは、受験勉強の負荷から解放されることであろう。確かに高専の場合もこのメリットは大きい。普通の高校生なら大学受験勉強に精を出している年頃から、工学の専門教育を始めることができる。

大学に比べると高専は授業時間が多いし、出席日数も厳格に勘定するし、実験や実習にも力を入れている。その上、一応は卒業研究というのやらせているし、教員も教育に関していえば大学職員より熱心で、多くの時間を割いているように感じる。その結果、卒業時点では短大卒の年齢であるにもかかわらず、高専生は大学の工学部卒の学生よりよく勉強しており、現場知識も豊富であるというのが、高専に来て感じた私の印象であると同時に、一般的にもそのような評価がなされている。これは高専の五年一貫教育システムの大きな利点である。

高専における一般教育の難しさ

高専に入学した時点では、高等学校と同じ年齢なので、特に最初の三年間は国語・数学・理科・社会・英語といった「一般科目」が重要である。高専は大学と同種の「高等教育機関」と位置づけられており、高専の一般科目の教員は高校の教員と違って、教員免許は必ずしも必要ないし、文部科学省の学習指導要綱の通りに授業する必要もない。一部に高校の教員経験者もいるが、多くは大学等の研究者出身で、学位を持った人も多く、その意識は大学教員に近い。しかし、高専の一般科目は大学の教養科目とは根本的に性格が違っている。

専門教育を早めにと始めるといっても、数学や理科の基礎がないとどうにもならないので、専門科目の教員が

らは一般科目担当者に厳しい要求が出される。また、専門外の一般教養についても、高専卒業生は大学卒に比べて物足りないという評価を受けることが多い。それが一番端的に顕れるのは語学力で、一般的に「高専出身者は英語が弱い」という傾向があるように見受けられる。これに応えるために、各高専ではTOEICの点数をあげるなど、実用英会話能力の向上に努めているようだが、私が見るところでは、高専生が弱いのもっと基本的な単語力の不足にあるようだ。それは明らかに受験を経なかったことによる差である。それ以外の基礎科目でも、高校の受験勉強で身につけた学力や知識は馬鹿にできないものである。それを高専に入ってから一般科目の授業だけで補うのは厳しい話で、これは高専の五年間一貫教育の弱点ではないかと思われる。

一九九一年の大学設置基準の大綱化にともない、多くの大学では「教養部」を廃止した。旧教養部教員は各学部配置され、「全学教育」と名前を変えた。ところが、専門学部と「全学教育」の教員間の溝は教養部時代からそれほど改善されているわけではない。特に私のいた大学ではキャンパスが違っていることもあって、意思の疎通は絶望的に困難であった。高専の場合にも「一般科目」と「専門科目」の教員間に溝がないわけではないけれども、同じ学校で、同じ会議に出て、常に顔をつきあわせている同士なので、お互いの連携は遙かに緊密である。それによって両者の整合性を高め、弱体な一般教育が救われている面もある。このことは高専型の一貫教育の良さの一つであろう。

五年間変えられないことの窮屈さ

六・三・三・四という学年区分は戦後の学制改革で導入され、厳格に実施されてきた。戦前の学制はもっと多様で、年齢区分も緩やかだった。旧制の高等学校や高専は新制移行時に、六・三・三・四という区分からはずれるため、すべて廃校になり、その大部分は国立大学に移行した。現在の高専は、戦後初めて六・三・三・四の学年区分からはずれて設置された教育システムである。

私の経験では、大学に入ってその講義を聴き始めたとき、初めて親元から離れたことも重なって、かなり

強いカルチャーショックを受けた記憶がある。大学では一人前の学生として扱われ、急に大人になった気分だった。子供から大人への転換期に、こういうカルチャーショックを与えるのは、教育上悪いことではない。その年齢を一八歳とした新制の学年区分は、少なくとも私にとっては妥当であった。ところが、高専ではそのカルチャーショックがまだ一五歳の入学時に来ることが多い。一五歳といえば多くは「反抗期」の真っただ中で、大人として処遇するには未熟な面が多い。私のいる久留米高専のキャンパスには、戦前から旧制の工専があり、学制改革の時に国立大学への移行が認められず、やむなく高専になったという事情があって、ほかの高専に比べても、とりわけ学生の自主性を重んじて、大人扱いにするといった大学的な気風が強い。これは精神的に自立した学生にはいいが、低学年の学生には時に問題を生む。

同じ一貫教育といっても、中学・高校とか高校・短大といった一貫教育では、少なくともその間に学校を変わるという区切りがあるのに対して、高専の五年間一貫教育はまったく区切りがない。区切りがあれば違った学則で管理上両者に差を付けることもできるが、高専ではそれができない。高専では入学時から「生徒」ではなく「学生」と呼ぶ習慣がある。これは学年の途中から呼び方を変えるわけにはいかないためだろう。私は着任した最初の入学式の時、ひな壇の上で校長告辞をしながら、それを聴く「学生諸君」の顔がまだあまりに幼いので、「これが高専なんだ」と実感した記憶がある。

このような区切りのない高専型の一貫教育は、効率的で整合性の高いカリキュラムが組めるという大きな利点があることは先に述べた通りである。しかしながら、この時期の五歳の年齢差を、十分認識して指導する必要がある。さらに高専では、専門教育を低学年から始めるために、入学時に志望学科が固定される。その後五年間を四〇名の少人数クラスで固定して指導できることは、効率的であり、大学に比べるとはるかにきめ細かな生活上の配慮ができる。しかし一方では、その枠に収まりきれなかった学生にとっては、苦痛の五年間になりうることも忘れてはならない。

長所は裏返すと短所でもある

以上、高専における五年、ないし七年間の一貫教育のメリットとディメリットについて書いてきた。ディメリットというのは、要約すると、早期の専門教育によって人格形成や基本的な素養の育成が、おろそかにされないかという心配、もう一つは、成長が著しい時期にかなり長い期間、一つの学校、あるいは一つのクラスに閉じこめられることの窮屈さである。幸いにしてそれに窮屈さを感じない人でも、適当な年齢に達したときにがらりと環境を変えてやるのが、成長の飛躍になることが多い。

といっても、私は高専という日本では特殊な教育システムを否定するためにこの文章を書いたのではない。高専が生まれて約四〇年、その教育システムはうまく機能し、我が国における実践的な技術者の育成に大きな寄与をしてきたことは、誰もが認めるところである。画一的な日本の教育システムの中にあって、今後も有力な選択肢の一つとして高専が機能していくことも間違いない。しかし、すべての面で欠点のないシステムはないし、長所は裏返すと短所でもある。重要なことは、高専の指導者も、学生諸君もそういった短所を自覚して、これをカバーする努力を怠らないことであろう。